

## 実施報告「子育て支援ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」

# ノーバディズ・パーフェクト・プログラムを実施して ー運営スタッフの立場からー

佐 伯 麻 衣<sup>1</sup>

広島文教女子大学と財団法人ひろしまこども夢財団の共同主催でノーバディズ・パーフェクト・プログラム（以下NPと略記）が行われた。筆者は、そのスタッフとして運営に携わった。

### 1. 運営スタッフの仕事

- ・学生託児スタッフ（学生ボランティア：ぶんこ）との連携
- ・託児スタッフ、NP参加者の駐車場確保
- ・学生ボランティアのプレイルームからのおもちゃ移動の手伝い
- ・託児受け入れのための会場の準備
- ・託児の受け入れ
- ・欠席・遅刻等をファシリテーターおよび託児スタッフへ連絡
- ・NP終了後、お見送り
- ・会場の片づけ

上記の中で、運営スタッフが心がけていたことは、安心して子どもを預けていくことができる暖かい空間作りである。参加者を「おはようございます」と笑顔でお迎えし、子どもにも声をかけを行う。子どもを預け、NPに行く参加者に対し、「いってらっしゃいませ」と送り出す。といった、暖かい雰囲気作りをすることを意識して行った。

### 2. NPを実施して感じたこと

初日は、母親が子どもを預ける際、子どもの泣き声も大きく、母親もなかなか子どもから離れることができずにいた。また、なかなか泣き声が止むことがなく、泣きやんでもすぐに泣き声が聞こえるといった状態であった。しかし、回を増すごとに、母親が子どもを預け、NPを行う部屋へ行くまでの時間が短くなり、子どもも泣きはするものの、泣いている時間は短くなり、最後の方ではほとんど泣き声が聞こえなくなった。

NPの中でも、始めは子どもが心配でしかたなかったが、だんだんと安心して預けられるようになったという声を聞くことができた。これも学生ボランティアが事前に子育て支援のボランティアへ積極的に参加したり、託児スタッフから多くのことを学ぼうとする姿勢が、母親たちが安心して子どもを預けることができる空間を作り上げたのではないだろうか。

---

<sup>1</sup>元広島文教女子大学心理教育相談センター相談員

そのような姿勢で託児に取り組むことで、始めは表情の硬かった学生ボランティアだったが、回を増すごとに笑顔が増えてくるようになった。また、担当する子どもが決まっていたので、母親が知らなかった子どもの姿を発見することもあり、それを母親に伝えることで、母親も自分の子どもにはそんな側面もあったのだと知ることができたようだ。

筆者は初めてNPに運営スタッフとして関わったが、NPは母親の育児不安を軽減したり、仲間がいるという安心感を得る場であるとともに、託児を通して子どもの新たな一面を発見することができる場でもあるのではないかと感じた。